

**研究拠点形成事業**  
**平成 29 年度 実施報告書**

A. (平成 26～29 年度採択課題用) 先端拠点形成型

**1. 拠点機関**

日本側拠点機関：	名古屋大学
(アメリカ) 拠点機関：	コロンビア大学
(フランス) 拠点機関：	コレージュ・ド・フランス
(ドイツ) 拠点機関	ベルリン自由大学

**2. 研究交流課題名**

(和文)：テキスト学による宗教文化遺産の普遍的価値創成学術共同体の構築

(交流分野：人文学)

(英文)：Academic Consortium for Creating the Value of Religious Cultural Heritage Through Text Studies.

(交流分野：Humanities)

研究交流課題に係るホームページ：<http://www.lit.nagoya-u.ac.jp/cht/>

**3. 採用期間**

平成 29 年 4 月 1 日～平成 34 年 3 月 31 日 (1 年度目)

**4. 実施体制**

**日本側実施組織**

拠点機関：名古屋大学

実施組織代表者(所属部局・職・氏名)：総長・松尾清一

コーディネーター(所属部局・職・氏名)：人文学研究科・教授・阿部泰郎

協力機関：筑波大学、大学共同利用機関法人人間文化研究機構国文学研究資料館

・国立歴史民俗博物館・国際日本文化研究センター、東京大学

事務組織：名古屋大学研究協力部研究支援課・文系事務部

**相手国側実施組織**（拠点機関名・協力機関名は、和英併記願います。）

（１）国名：アメリカ

拠点機関：（英文）Colombia University

（和文）コロンビア大学

コーディネーター（所属部局・職・氏名）：（英文）Faculty of East Asia, Professor, Haruo SHIRANE

協力機関：（英文）Harvard University

（和文）ハーバード大学

経費負担区分（A型）：パターン１

（２）国名：フランス

拠点機関：（英文）College de France

（和文）コレージュ・ド・フランス

コーディネーター（所属部局・職・氏名）：（英文）Institute of Advanced Japanese Studies, Professor, Jean Noel ROBERT

協力機関：（英文）Paris Diderot University, Strasbourg University, EFEO, INALCO

（和文）パリ第七大学、ストラスブール大学、極東学院、東洋言語文化学院

経費負担区分（A型）：パターン１

（２）国名：ドイツ

拠点機関：（英文）Free University of Berlin

（和文）

コーディネーター（所属部局・職・氏名）：（英文）Faculty of History, Professor, Jochem KAHL

協力機関：（英文）University of Heidelberg, University of Hamburg, Austrian Academy of Science

（和文）ハイデルベルク大学、ハンブルク大学、オーストラリア・アカデミー

経費負担区分（A型）：パターン１

## 5. 研究交流目標

### 5-1. 全期間を通じた研究交流目標

○人類が創出した文化の所産は、その普遍的価値を等しく認められ、尊重されるべき共通の遺産だが、その頂きに立つ宗教の生み出し、その象徴となる遺産は、過去にも、とりわけ現在の世界の状況において、深刻な危機に瀕している。多様性を認め、異質な文化と共生することを理想とする社会にあって、人文学が果たすべき責務のひとつに、人類の宗教文化の遺産についての普遍的な意義を、その情報を含め、諸研究機関の連携による分野間の学知の総合によって見出し、提言する学術創成が求められる。そのための総合的な研究の蓄積と理念

において領導する欧米の中核拠点大学との、国際共同研究が必要とされている。○世界各国の文化機関（博物館・美術館・大学・図書館等の）所蔵分を含めて、各地に伝えられる宗教が生み出した文化遺産に対する総合的なテキスト学による探査と研究を推進する先端的国際研究拠点を、名古屋大学文学研究科の「人類文化遺産テキスト学研究センター」（CHT）に構築する。このCHTでは、日本／アジアの宗教文化遺産のアーカイブス化と探査で挙げた大きな成果を、まずコロンビア大学、コレージュ・ド・フランス、ベルリン自由大学との成果の共有を通じて連携し、中堅・若手研究者の相互交流による広域な大学間および文化機関間の研究集会や国際ワークショップ開催による“宗教テキスト文化遺産”研究コンソーシアムの活動を立ち上げる。

○この国際学術連携を通じて、5年間で、日本を中心に（アジア／ヨーロッパ／中東等を包摂した）世界的な宗教テキスト文化遺産の普遍的価値の認識を共有し、そのアーカイブス化を通じた情報共有と、人文学における宗教テキスト研究が有する画期的な学術上の発展可能性を、最先端の国際共同研究によって提起する。

## 5-2. 平成29年度研究交流目標

### <研究協力体制の構築>

世界的な宗教文化遺産のテキスト学による研究と、学術上の社会実践を担う学術共同体を構築する端緒となるための本事業の、初年度の取り組みは、まず名古屋大学人類文化遺産テキスト学研究センター（CHT）と欧米三拠点機関それぞれとの、5年間にわたる研究交流計画を具体的に策定することから開始される。計画の中心は、四機関を中軸とした「宗教文化遺産テキスト学」の学術共同体発足に向けてのロードマップである。この行程を如何に実現化させていくか、そのヴィジョンを共有するために、各機関のコーディネーターと共同研究・開催の国際研究集会・研究者・院生の派遣や受入について協議し、四機関および関連研究機関が相互に有機的な連携を図れるように調整を行う。今年度は、まずコロンビア大学から名古屋大学CHTに研究者1名を5月から8月にかけて受け入れ（別経費による）、共同研究を発足させると共に国際ワークショップを企画する。コレージュ・ド・フランスとは10月に国際研究集会を開催し、日本から研究者20名を派遣すると共に、米国から研究者を5名招聘する。また、ベルリン自由大学には年度内に日本から研究者2名を派遣する予定である。この他、関連研究機関（ストラスブール大学、ハイデルベルク大学、ハンブルク大学およびオーストリア科学アカデミー等）にて年度内に開催される研究集会・ワークショップ等に日本から研究者を派遣し、今後の機関相互の研究交流を促進し媒ちとなることに努める。加えて、南山大学宗教文化研究所による宗教文化セミナーに各国の大学院生を招くことにより、各研究者の指導する院生間の交流も発進する。以上が実施されることによって、各拠点および連携機関との恒常的な研究交流と、より重要な学術上の目標を共有する基盤を作ることを目指す。

### <学術的観点>

テキスト学による宗教文化遺産の普遍価値を、その歴史・考古学的文脈上の考察や言語・文学理論からのアプローチ、図像学やメディア論など、多角的かつ諸分野の融合により連携

して取り組もうとする本事業の、初年度における活動は、以下のように一対一の共同研究から始められる。まずコロンビア大学と宗教文化遺産に関するテキスト学・文化論的アプローチによる共同研究を発足させ、コレージュ・ド・フランスでは、宗教テキスト遺産としての「論義」を主題とした国際研究集会を開催し、ベルリン自由大学には研究者を派遣して今後の共同研究および研究集会の計画を立案する打合せを研究会で行う。これに加え、宗教文化遺産の現地調査を兼ねた国際ワークショップを随時行うことにより、今後 5 年間の研究機関を通じて相互の間に形成される必要のある、世界的な宗教文化遺産に関する（批判的な問題提起を含む）共通認識を醸成する一ステップとする。遺産の対象領域だけでなく、国毎にも、各学問分野毎にも異なるディシプリンに拠って形成される認識には当然のことに差があり、対象に向き合う方法や技術、データ化した資料の分析や解釈、論述や報告におけるアカデミックな作法までが多様ななかで、いかに成果を共有する学術上の地平を見出し、共同して切り拓いていくかが問われている。特に宗教に関わる遺産は、紛争と対立の標的となるケースが多く、歴史的な経緯についての正確な知識の共有を含め、自覚的に文化的多様性を尊重しつつ（常に少数者の立場に配慮して）調査研究上の共通言語を探っていくことが求められよう。

#### <若手研究者育成>

本課題事業の特色ある活動のひとつが、南山大学宗教文化研究所と CHT との共同による「宗教文化セミナー」を毎年 1 回、期間中 5 回開催することである。毎年異なるテーマの許に日本および世界の宗教文化に関わる研究に取り組む、海外大学の大学院生に呼びかけ、公募によって報告者を毎回 5 名選定し名古屋へ招き、3 日間のセミナーと宗教文化遺産ワークショップを、同様な研究に取り組む日本の大学院生や若手研究者と共同で体験する企画である。こうしたセミナーを連続して積み重ねていくことにより、広く各分野の宗教文化を学ぶ院生が、文化遺産の重要性やそれが抱える課題を発見・自覚し、また最新のテキスト学を含む先端的研究や他の異なる学問風土の成果を知ることで、知的刺激を受けて自己の研究水準向上にフィードバックする効果が期待される。何よりも、共通したテーマの許に集うことによって生ずる交流を通じて、将来の宗教文化遺産を介した学術に携わる若者同志の連帯と連携が生みだされること、そのなかに宗教文化の多様性の相互の尊重と遺産の普遍価値の共有を求める動きが生ずることを期すものである。研究者の派遣と受け入れに関しても、名古屋大学 CHT にコロンビア大学から中堅研究者を短期（2～3 ヶ月）受け入れるが、その際に相互の大学院生による学術交流会やワークショップを主催・支援していただくようにスケジュールを組み立て、またベルリン自由大学を始め、いくつかの研究機関に研究者を短期派遣する際にも、必ず若手研究者を扨ぶか同行するように配慮し、かつ派遣先の院生・若手研究者と交流する機会を設けることとする。これらの機会を契機として、5 年間で機関相互の院生・若手研究者が、その成長に随ってより豊かな業績を挙げるだけでなく、自ずから互いの分野の達成を享けて領域複合的な研究に挑戦するような環境を作ることが望めよう。

#### <その他（社会貢献や独自の目的等）>

名古屋大学 CHT では、研究集会・セミナー・講演会等は原則全て公開しており、市民の

参加をすすめ、成果物としての報告書等に限らず、研究の過程も大部分が社会に開かれている。また、地域に伝承された宗教文化遺産に関する調査・研究の成果は、中部・東海・北陸・関西を中心に自治体や各文化教育機関と連携して公開フォーラムや、展覧会を企画・開催することにより、絶えず社会に還元している。本事業においても、科研（S）を基盤として、平成 30 年に東京・神奈川を中心とした五研究機関（うち二機関は人間文化研究機構所属）による連携展示「列島の祈り—日本の宗教儀礼とそのテキスト遺産」を企画しており、今後はその準備段階として国際的な共同研究ネットワークの許でその展示資料の研究や新たな成果の発信に、各拠点の研究者および大学院生からの協力が期待される

## 6. 平成 29 年度研究交流成果

（交流を通じての相手国からの貢献及び相手国への貢献を含めてください。）

### 6-1 研究協力体制の構築状況

宗教文化遺産学・テキスト学共同体（コンソーシアム）構築の端緒として、コーディネーターである阿部は、相手側拠点機関の各代表の 3 名と 6 月及び 10 月に日本およびパリで共同研究について打合せを行った。コロンビア大のシラネ教授（および名大特任教授として滞在中のコモ教授）と名古屋で共同研究の課題について検討し、平成 30 年度末（3 月）に「境界」の解釈—文化論というテーマの許に日本の宗教文化遺産をめぐる国際研究集会を行い、その成果を英文論集として出版する方向で合意し、そのための研究組織と学術基盤を整えることとなった。その土台として、学習院大学の兵藤教授による盲僧・語り物研究会と協力し、これを支援することになった。

フランス、コレージュ・ド・フランスのロベール教授と 6 月パリにて、既に合意している「論義」をめぐる宗教文化テキスト遺産の共同研究についての国際研究集会について打合せし、10 月にコレージュ・ド・フランスにて 3 日間「論義と宗論の文化史」をめぐる国際研究集会を共同で開催した。更に、次年度 5 月に龍谷大学で論義に関する学会を開催（「日本仏教と論義」）し、これらの成果を元に仏教百科全書『法宝義林』論義篇を編集する目標を設定、そのための行程表も作成した。『法宝義林』編纂推進は永年の懸案であり、2013 年度にコレージュ・ド・フランスで行われた第一回『法宝義林』編纂会議以降、停滞していた企画が、ようやく動き出したのは、本事業による貢献である。

ドイツ側からは、ベルリン自由大学のヨヘム・カール教授が、周藤芳幸教授の招待に応じて 10 月に来日し、国際ワークショップ「古代エジプト世界における宗教儀礼の斉一性と地域性」と題するワークショップで基調講演を行った。このワークショップには、ドイツ側からは同じくベルリン自由大学のシュテファン・ハートレップ（エジプト文献学）、マインツ大学の北川千織（エジプト動物考古学）が参加し、日本側からは周藤教授に加えて中部大学の中野智章（エジプト学）、関西学院大学の藤井崇（古代ローマ史）の両名が出席し、研究報告と討論を行った。古代エジプト文明が誇る膨大な宗教文化遺産は、ナイル世界で繰り広げられていた宗教儀礼がいかに豊饒な世界観を内包していたかを雄弁に物語っているが、その広大な領域内でそれらの宗教儀礼がどれほど斉一化されていたのか、あるいは地域性を有していたのかという問題については、あまり深く掘り下げた考察が行われてはこなか

った。このワークショップでは、地理的に近接する二つの遺跡について、カール教授が調査しているアシュートと周藤教授が調査しているアコリスからの知見を比較対照することで、この問題の解明にあたっての足掛かりを得ることができた。今後は、ベルリン自由大学の調査と名古屋大学の調査との相互乗り入れも視野に入れ、緊密な連携をとりながら、平成 31 年度に開催を予定している次回のワークショップに向けた準備を進めていくことで、両者は合意した。

この他、ドイツ語圏では第三国として、オーストリア国立アカデミーのベルンハルト・シヤイド教授と共同して宗教テキスト・アーカイヴスについて、仏教寺院と修道院・神道・民族学のアーカイヴス化をめぐる国際ワークショップを開催（6 月）、更に（2018 年 3 月）ハイデルベルグ大学で国際ワークショップ「聖なるテキストのマテリアリティ」（第 3 回）を開催した。また 3 月には木俣教授がストラスブール大学を訪問し、シェーレ教授と平成 30 年 9 月のセミナー開催について合意した。

フランス語圏では、コーディネーターは、ストラスブール大学における SEJA の国際研究集会で参加報告を行った（平成 30 年 3 月）。また、アメリカでは、ハーバード大学にて美術館収蔵の宗教文化遺産の調査を行い、ロブソン教授と平成 30 年度の共同研究の打合せをし、2018 年 6 月に名古屋で行われる双方の若手大学院生による学術交流会と像内納入宗教テキストを巡る国際ワークショップ開催の予定を合意した。本事業を契機として各国の学術事業活動に参加を要請され、講演や報告を行い、かつ、あらたな学術交流の機会が多くうまれたことは、各相手国側がこの事業を評価した為であり、これは国際間の人文学における学術交流を促進するための貢献に他ならず、また、その成果を各国の学術発展のために還元することによる本事業の果たした相手国側への多大な貢献といえる。

以上、各拠点大学のコーディネーターとそれぞれの共同研究について、具体的な進展のために課題を設定し、平成 30 年度を中心に各種セミナーの開催予定を決め、成果の発表媒体に至るまで検討・議論を進めた。

## 6-2 学術面の成果

本拠点形成事業は、これまで名古屋大学の人文学研究が COE プログラム等により積み上げてきたテキスト学の知見と方法理論の蓄積を、宗教文化遺産を対象として、国際共同研究により領域横断的に、その普遍的価値と意義を発見し、広く社会に発信する、実践的人文学の試行を企てるものである。共同する各国は、それぞれに学術に関する方法論・解釈・成果評価基準や社会への志向等が異なるも、本共同研究の実施を通じて、文化遺産の普遍価値の認識を共有する営為により学術成果を共有・発信する過程を創り出していくことで、より高次の普遍性を獲得すべく努める。それはまた日本の人文学の強みを十分に活用し、有効にその達成の為に貢献する実績を生みだしていく過程でもある。そのための共有の学術資源としてのテキスト学のあらたな次元での形成を、国際的な研究ネットワーク形成と共に追究する端緒が、本事業の発足によって開かれた。これが初年度における最大の学術面での成果である。

CHT の学術上の特質は、文献資料を中心にしたテキスト解釈によるアーカイヴス学と、

図像イメージと造形を主とした視覚文化研究、歴史考古資料・遺跡を中心とする物質文化研究の、三つの次元にまたがるテキスト学を具えることであるが、本共同研究では、これら諸位相の次元を有機的に統合するテキスト学のアプローチを積極的に採用し、提案することによって、対象となる各種の宗教文化遺産を多元的かつ復元的に再現前しうる可能性を実証的に開拓することを目指す。特にハイデルベルク大との三次にわたる共同国際ワークショップ「<聖なるもの>のマテリアリティ」の成果を他の共同研究の推進にあたっても生かして、より豊かな総合と実験を展開することに期待が持てるようになった。これが次年度以降につながる大きな学術的発展の可能性である。

### 6-3 若手研究者育成

国内では、南山大学宗教文化研究所と名大 CHT の共同による「第一回 若手日本宗教文化セミナー」が 2018 年 1 月に開催され、5 名の海外若手宗教研究者による研究報告を行い、報告者同士のつながりも築かれた。更に 5 名の日本側宗教研究者からなるディスカッション（うち 2 名は名大）が加わり、相互のあらたなる研究連携も生じている。また、次年度も同時期に同規模のセミナーを開催予定することで合意した。充実した討議が行われ、参加した海外若手研究者の研究進展にとって誠に有益な機会となった。この経験に基づき、この他にも開催した全てのセミナーにおいて、可能な限り、大学院生を含む若手研究者の参加と報告を優先し国際共同研究交流の契機となることを期した。

### 6-4 その他（社会貢献や独自の目的等）

本事業の研究対象であると共に、価値認識創成の焦点となる宗教文化遺産の意義を、いかに研究活動を通して社会に示し、その成果を学界のみならず広く社会と世界に発信し還元するかは、まさに事業の目標でありミッションである。これについての取組みとして、開催した各セミナーの成果をより効果的な方法で公開する手段を、各機関と連携しつつ試行している。（たとえば、コレージュ・ド・フランスの学会は、全て VTR に収録し、ネット上で世界に配信された。）国内および名大 CHT において開催したセミナー・学会は全て公開とし、学会関係者のみならず一般にも開放している。また、重要な企画については全学の社会連携部門を通じてプレスリリースし、報道諸機関と諸媒体に広報して、着実な社会的認知を獲得しつつある。今後は、これらを更に全国的に周知される活動として成長させていく予定である。

また、世界的な宗教文化遺産の価値創成を目指す本事業は、CHT 単独で実現できる範囲は限られ、むしろ国内外の文化遺産に関与する諸研究機関や所蔵機関との有機的連携と協力・協業の持続的な活動があらゆる面で不可欠である。このため、平成 29 年度中には、金沢大学の国際文化資源研究センターおよび龍谷大学の世界仏教文化研究センターと研究活動における連携協力協定を締結し、相互に情報を共有しつつ多面的に宗教文化遺産に関する調査・研究活動を展開していくことで合意した。そのため既に平成 30 年度の国内外の幾つかのセミナー等で協力する企画が実現している。その一部は平成 30 年度本事業計画のうちに含まれている。

### 6-5 今後の課題・問題点

交流事業計画は、予想以上に進捗し、拠点以外の各協力機関も本事業に賛同・協力をいただいた。そのため、初年度より各拠点等と調整のうえ平成30年度にはより多くのセミナーを行う予定をしていたが、交流事業費のみでは賄うことができないため自己財源を投入してもなおセミナーを取りやめざるをえない状況にある。また、初年度は各拠点との共同研究の立ち上げ、今後の交流予定、研究計画立案が中心となり、3ヶ国の各拠点とそれぞれのコーディネーター同志のつながりをより緊密なものにしていくため、次年度以降に、各共同研究の遂行においてコーディネーターや参加研究者が互いに各拠点を訪問しセミナー等に参加するように工夫して、自ら相互の交流を行うように配慮していく。最終年度には、全拠点のメンバーが名大における総合的な研究集会に集い、ひいては相互の協力による学術共同体を発足させる基盤を整える必要がある。

### 6-6 本研究交流事業により発表された論文等

- |                               |     |
|-------------------------------|-----|
| (1) 平成29年度に学術雑誌等に発表した論文・著書    | 34本 |
| うち、相手国参加研究者との共著               | 0本  |
| (2) 平成29年度の国際会議における発表         | 18件 |
| うち、相手国参加研究者との共同発表             | 1件  |
| (3) 平成29年度の国内学会・シンポジウム等における発表 | 21件 |
| うち、相手国参加研究者との共同発表             | 0件  |
- (※ 「本事業名が明記されているもの」を計上・記入してください。)  
(※ 詳細は別紙「論文リスト」に記入してください。)



## 7. 平成29年度研究交流実績状況

### 7-1 共同研究

整理番号	R-1	研究開始年度	平成29年度	研究終了年度	平成31年度
研究課題名	(和文) 宗教文化遺産のテキスト学—境界とライフサイクル (英文) Borders and Lifecycles: The religions cultural heritage by text studies.				
日本側代表者 氏名・所属・職	(和文) 阿部泰郎、名古屋大学人文学研究科、教授 (英文) ABE Yasuro, Nagoya University, Graduate School of humanities, Professor				
相手国側代表者 氏名・所属・職	(英文) Haruo SHIRANE, Columbia University, Faculty of East Asia, Professor				
29年度の研究 交流活動	<p>5月より8月までマイケル・コモ教授が人文学研究科特任教授として名大に赴任及び名大 CHT に滞在し研究活動を行った。6月にはコロンビア大学側代表者ハルオ・シラネ教授が来日し、名大において共同研究の打合せを代表者および近本准教授と行い、研究課題について具体的提案を元に検討し、基本的な方向を確認のうえ名大で催された説話文学学会大会シンポジウムにも参加した。また、同月にシラネ教授と共に兵藤学習院大学教授の主宰する盲僧・語り物研究会に参加し、この共同作業を通じて共同研究の基盤を構築する方向で合意した。8月中旬にはコモ教授と国立台湾大学に赴き、宗教文献の共同調査を行い、30年3月には代表者がコロンビア大学の美術史国際研究集会に参加し、コモ教授と次年度以降の共同研究について打合せを行った。</p>				
29年度の研究 交流活動から得 られた成果	<p>シラネ教授から日本文化における「境界」をめぐる文化的諸課題について、特に中世の宗教・文学・芸能を中心に共同研究を行うという提案を受け、代表者は具体的な研究課題と対象について本拠点研究課題である宗教文化遺産とテキスト学を目的と方法に加えることを提案し、その要素を取り入れて、宗教と芸能を主要な対象とすることで合意した。そのため平成30年度末(2019年3月)にコロンビア大学で国際研究集会を開催し、代表者の基調講演を含め、日本側と米国側の新進および第一線研究者による本課題への意欲的な研究発表を元に、論文化し、厳正で学術的な編集作業を経て、英文論集として公刊する共著を作成する目標を設定した。また今後、日本のみならずアジア(韓国、台湾、中国)を含むより広汎な研究交流を本共同研究の軸として展開させて、より多元的な宗教文化遺産の再認識、創成のためのネットワークを築く方向を確認した。</p>				

整理番号	R-2	研究開始年度	平成 29 年度	研究終了年度	平成 32 年度
研究課題名	(和文) 宗教テキスト遺産としての聖なることば (ヒエログロシア)				
	(英文) The hierogram as religions heritages by text studies				
日本側代表者 氏名・所属・職	(和文) 阿部泰郎、名古屋大学人文学研究科、教授				
	(英文) ABE Yasuro, Nagoya University, Graduate School of humanities, Professor				
相手国側代表者 氏名・所属・職	(英文) Jean Noel ROBERT, College de France, Institute of Advanced Japanese Studies, Professor,				
29年度の研究 交流活動	事業開始以前(平成 28 年度)にロベール教授を名大 CHT に招聘し、研究会議を開催して既に合意した研究課題にもとづき、宗教文化のテキスト遺産として日本仏教が伝承形成した「論義」の文化を多角的に検討してきた。その文化遺産としての意義を再発見するための国際研究集会開催に向けて 6 月にパリへ代表者が赴いて打合せを行った上で、10 月 6,7,8 日の 3 日間コレージュ・ド・フランスを会場として日本側研究者 10 名と、仏・英・米の 3 ヶ国の仏教研究者 10 名が集まり、公開型の研究発表と集中的な討議を行った。この研究集会を基礎として、更に日本および海外での継続的な研究会議や公開シンポジウム等を開催することで同意し、その研究成果の具体化の方法を検討した。				
29年度の研究 交流活動から得 られた成果	10 月にコレージュ・ド・フランスで行われた国際研究集会により、本共同研究の主題である「論義」の日本仏教文化史上の範疇が、より広く「宗論」ないし「諸宗論」を含む、宗義にもとづく仏教カテゴリーの生成展開と不可分の聖典テキストをめぐる解釈活動であることが明らかになった。また、単なる経典注釈や宗義上の論争の場を越えた重要な意義を担う運動であること、あるいは論義の国家的法会としての儀礼やその宗教空間の果たした文化的役割についても認識が深められ、単に仏教学のみならず、人文学全体にわたる大きな学術的テーマに成り得ることも明らかになった。この問題提起を更に広く共有すべく、次回は龍谷大学においてセミナーを継続し、公開シンポジウムを開催することが決定し、持続する研究活動となった。また、その研究成果を結集し、共同で編集・翻訳してフランス極東学院が刊行する仏教百科全集『法宝義林』の特別篇として「論義」を特集する学術刊行物として公刊するという成果発信の為のコンテンツが形成された。なお、コレージュ・ド・フランスでの 6 月の公开发表は全て録画され、世界に配信されて視聴することができ、リアルタイムの成果発信も可能となっている。				

## 7-2 セミナー

整理番号	S-1
セミナー名	(和文) 日本学術振興会研究拠点形成事業「文化遺産としてのアーカイヴス」
	(英文) JSPS Core-to-Core Program “The archives as cultural heritages “
開催期間	平成 29 年 6 月 2 日 ~ 平成 29 年 6 月 3 日 (2 日間)
開催地(国名、都市名、会場名)	(和文) オーストリア、ウィーン、アジア文化研究所
	(英文) Austria, Vienna, Institut für Kultur und Geistesgeschichte Asiens
日本側開催責任者 氏名・所属・職	(和文) 阿部泰郎、名古屋大学人文学研究科・教授
	(英文) ABE Yasuro, Nagoya University, Graduate School of humanities, Professor
相手国側開催責任者 氏名・所属・職 (※日本以外での開催の場合)	(英文) Bernhard Scheid, Austrian Academy of Sciences, Professor

### 参加者数

派遣先 派遣元	セミナー開催国 (オーストリア)	
	A.	B.
日本 〈人／人日〉	A.	4 / 16
	B.	0
オーストリア 〈人／人日〉	A.	1 / 2
	B.	0
合計 〈人／人日〉	A.	5 / 18
	B.	0

A. 本事業参加者(参加研究者リストの研究者等)

B. 一般参加者(参加研究者リスト以外の研究者等)

※日数は、出張期間(渡航日、帰国日を含めた期間)としてください。これによりがたい場合は、備考欄を設け、注意書きを付してください。

セミナー開催の目的

宗教文化遺産の創成・保全・継承をめぐることは、多くの課題が今後提起されよう。そしてその基盤となるアーカイヴスにおいて、その諸問題は端的に集約されるであろう。宗教文化遺産をめぐる今後の国際的・普遍的価値創成を目指す端緒として、アーカイヴスをめぐる文化創成についての国際的な研究および実践に取り組み、その成果を共有する。またこうした研究と実践の積み重ねと研究連携を通して、宗教文化遺産による横断的な学術共同構築を目指す。本企画は、歴大な蓄積のある諸民族調査資料のアーカイヴス化に取り組む南山大学研究者を仲介として、日本の宗教文化遺産のうち、神道に関する分野領域のアーカイヴスに従事するオーストリアと日本研究者(CHT)と國學院大學の研究者が、それぞれ具体的なアーカイヴス化とその成果の報告を行う。ウィーン大学は民族学を中心とする日本研究のヨーロッパにおける中心的センターであった歴史があり、その研究の蓄積をもとに、現在は神道の分野で日本研究が継承されている。そして本拠点形成事業の一端であるベルリン自由大学、ハイデルベルク大学、ハンプルク大学と学術的に連なり、ドイツ語圏の一環としての密接な研究連携がある。ここに、第三国であるウィーンにおいて本ワークショップを開催する必要性が求められ、ドイツを拠点とする研究展開へ発展させる。なお、この後パリへ移動し、コレージュ・ド・フランスにおいて、フランス側コーディネーターと10月に予定されている学会の予備的ワークショップを行う(6月7日・8日)

<p>セミナーの成果</p>	<p>オーストリア側コーディネーター、シャイド教授の司会の許で、特に神道を中心とした日本の伝統的宗教文化遺産の伝来とその調査による研究成果を提示した。オーストリアに良好な状態で伝存する修道院における典籍、文書のアーカイブとその調査研究の現状とを比較するという当初の目標は、神道資料もやはり仏教寺院アーカイブの一環として形成・伝承されていた点で非常に共通点と普遍性を有するものであることが浮かび上がり、これに加えて、各種の神道史料の解析や、民族誌記録のアーカイブス化、また情報理論からのアーカイブス認識など、多彩な視点と具体的なテキスト資料との実践的研究成果が提示され、アーカイブスの文化遺産としての重要な意義が一層鮮やかに浮かび上がった。これを機に、西欧修道院アーカイブスと日本およびアジアの仏教寺院アーカイブスとの比較研究という大きな視点での共同研究課題が生まれ、継続する契機をもたらした。エクスカーションでは、ウィーン近郊ハイリゲンシュタットのシトー派修道院を見学し、12世紀以来存続する文書と図書館の二つのアーカイブスを修道士に案内された。更に翌日は、メルク修道院の図書館も見学した。</p>	
<p>セミナーの運営組織</p>	<p>オーストラリア科学アカデミー(B.シャイド教授)側が会場提供を含めワークショップの運営を全て行い、更に翌日のエクスカーションの手配と運営も担当した。</p>	
<p>開催経費 分担内容 と金額</p>	<p>日本側</p>	<p>内容：外国旅費 金額：1,832,400円 不課税・非課税取引に係る消費税 140,198円</p>
	<p>オーストリア側</p>	<p>内容：会場費、エクスカーション車両代、謝金等</p>

整理番号	S-2
セミナー名	(和文) 日本学術振興会研究拠点形成事業「宗教文化遺産としての論義とそのテキスト」 (英文) JSPS Core-to-Core Program “The Rongi and texts which consider as a religions cultural heritage “
開催期間	平成 29 年 10 月 10 日 ～ 平成 29 年 10 月 12 日 (3 日間)
開催地(国名、都市名、会場名)	(和文) フランス、パリ、コレージュ・ド・フランス (英文) France, Paris, College de France
日本側開催責任者 氏名・所属・職	(和文) 阿部泰郎、名古屋大学人文学研究科・教授 (英文) ABE Yasuro, Nagoya University, Graduate School of humanities, Professor
相手国側開催責任者 氏名・所属・職 (※日本以外での開催の場合)	(英文) Jean Noel ROBERT, College de France, Institute of Advanced Japanese Studies, Professor,

派遣先 派遣元		セミナー開催国 (フランス)
日本 〈人／人日〉	A.	10 / 71
	B.	6
フランス 〈人／人日〉	A.	1 / 3
	B.	54
アメリカ 〈人／人日〉	A.	0 / 0
	B.	2
イギリス 〈人／人日〉	A.	0 / 0
	B.	1
合計 〈人／人日〉	A.	11 / 74
	B.	63

A. 本事業参加者(参加研究者リストの研究者等)

B. 一般参加者(参加研究者リスト以外の研究者等)

※日数は、出張期間(渡航日、帰国日を含めた期間)としてください。これによりがたい場合は、備考欄を設け、注意書きを付してください。

<p>セミナー開催の目的</p>	<p>仏教における言説－儀礼という宗教テキスト次元での文化遺産というべき論議 (Holystic debate) の、とくに日本における歴史とその果たした役割、意義を広く文化史的にとらえ、問題化する。とくに、宗派・寺院の内部で儀礼的に完結する論議にとどまらず、宗派間での対論として自宗の教義の真正性・正統性や優劣を争う宗論や、また相互の位置や序列体制を承認するための諸宗論の側面にも注目し、論議によって生みだされた論理の文法や知識および儀式・芸能などの文化と、宗論や諸宗論の影響の許で生みだされた諸文芸などにも注目し、その普遍的意義を問う。</p>	
<p>セミナーの成果</p>	<p>日本側研究者 10 名(翻訳協力者 1 名)とフランス側研究者 8 名(うちアメリカ 2 名、イギリス 1 名)による「論議」を主題とする多面的で人文学諸分野における総合的な視点からの国際学会はこの分野で最初の試みであり、この点でも大きな意義がある。しかも、単に仏教学からの専門分野に限らず、文学、儀礼、芸能など文化史的な課題として論議を対象化し、またその範疇を狭く限定せず、「宗論」ないし「諸宗論」という、日本仏教の基本カテゴリーを生成する活動としてより広く論議の解釈学的運動を把えることで、その宗教文化遺産としての意義が改めて再発見された。これが本学会の最大の成果と言える。各報告者の要旨(フランス語訳)と当日のフルペーパーの他に、本セミナーのための基本資料テキストを網羅した、代表者編『論議と宗論の文化史 資料編』(89 頁)も用意、提供され、これらを元に当初より提案された『法宝義林』論議篇の編集作業の礎を築くことができた。また、今回参加できなかった日本側の研究者を中心に、ロベール教授をゲストとして、龍谷大学の世界仏教研究センターにおいて平成 30 年 5 月に「日本仏教と論議」学会が開催される運びとなり、更にこの共同研究が継続、進展することも大きな収穫である。</p>	
<p>セミナーの運営組織</p>	<p>学会運営に関する一切の業務はコレージュ・ド・フランス側が担当した。</p>	
<p>開催経費 分担内容 と金額</p>	<p>日本側</p>	<p>内容：外国旅費 金額：4,418,380 円 謝金 275,260 円 外国旅費・謝金等に係る消費税 360,252 円</p>
	<p>フランス側</p>	<p>内容：会議費、学会運営諸費用、ビデオ記録、公開費用</p>

整理番号	S-3
セミナー名	(和文) 日本学術振興会研究拠点形成事業「日本宗教文化セミナー」
	(英文) JSPS Core-to-Core Program “Religious Cultural Seminar in Japan “
開催期間	平成 30 年 1 月 7 日 ～ 平成 30 年 1 月 9 日 (3 日間)
開催地 (国名、都市名、会場名)	(和文) 日本、名古屋、南山大学
	(英文) Japan, Nagoya, Nanzan University
日本側開催責任者 氏名・所属・職	(和文) 阿部泰郎、名古屋大学人文学研究科・教授
	(英文) ABE Yasuro, Nagoya University, Graduate School of humanities, Professor
相手国側開催責任者 氏名・所属・職 (※日本以外で開催の場合)	(英文) なし

#### 参加者数

派遣先 派遣元		セミナー開催国 (日本)	
		A.	B.
日本 〈人／人日〉	A.	12 / 49	
	B.	10	
合計 〈人／人日〉	A.	12 / 49	
	B.	10	

A. 本事業参加者 (参加研究者リストの研究者等)

B. 一般参加者 (参加研究者リスト以外の研究者等)

※日数は、出張期間 (渡航日、帰国日を含めた期間) としてください。これによりがたい場合は、備考欄を設け、注意書きを付してください。



<p>セミナー開催の目的</p>	<p>宗教文化遺産に関する人文学諸分野の若手研究者の関心とその研究への取り組みを支援し、学術水準の向上と問題の共有を目指すため、特に日本の宗教文化を対象として学ぶ海外大学院の博士課程前期課程・後期課程の大学院生を参加者として、国際公募により優れた研究を日本語で報告し討論を行うことに挑戦する報告者を5名程度選出し、研究参加者として加え、日本の同分野を研究する大学院生、ポストドクターや研究者と討議することにより、国際的な宗教文化全般の学術研究の交流と将来の研究交流の展開を目指す。なお、本セミナーは、本拠点形成事業期間の5年間毎年1回開催し持続させる。</p>									
<p>セミナーの成果</p>	<p>公募により厳正に選出された6名の海外大学(日本の各大学研究機関に留学、在籍中)の日本宗教研究を学ぶ大学院生ないし若手研究者が、あらかじめ報告要旨を提出し、当日の報告は日本語で発表を行った。1名ずつ日本宗教研究者(海外籍を含む)をディスカッサントに配すという手厚い配慮の下に、各報告者は2日間のべ15時間に及ぶ充実した議論を展開した。その後、研究者交流を行い、翌日の熱田神宮・猿投神社等への宗教遺産エクスカージョン及びセミナーに参加し、多大な知見と今後の研究交流の種子が撒かれることになった。質疑討論を経た上で報告は論文化し、宗教文化研究所の英文ジャーナルに投稿することも義務付けており、概要は当CHTのニューズレター等に掲載する予定である。</p> <p>今回の実施を経て、次年度以降、毎年の開催は海外若手研究者、留学生の需要に大いに応えるものであることが明らかになり、南山宗教文化研究所との連携も、これ以外の交流企画についても、いよいよ密になるものと期待される。</p>									
<p>セミナーの運営組織</p>	<p>南山大学宗教文化研究所が公示および報告者の公募、選考、連絡を担当し、会場を提供した。名大CHTは、エクスカージョン及び交流会と付帯セミナーを担当し、相互に緊密に連携して実施に臨んだ。</p>									
<p>開催経費 分担内容 と金額</p>	<table border="1"> <tr> <td data-bbox="386 1818 579 1861"> <p>日本側</p> </td> <td data-bbox="580 1818 798 1861"> <p>内容：国内旅費</p> </td> <td data-bbox="799 1818 1359 1861"> <p>金額：202,160円</p> </td> </tr> <tr> <td></td> <td data-bbox="580 1863 798 1906"> <p>ワークショップ開催費</p> </td> <td data-bbox="799 1863 1359 1906"> <p>103,350円</p> </td> </tr> <tr> <td></td> <td data-bbox="580 1908 798 1960"> <p>会議費</p> </td> <td data-bbox="799 1908 1359 1960"> <p>149,497円</p> </td> </tr> </table>	<p>日本側</p>	<p>内容：国内旅費</p>	<p>金額：202,160円</p>		<p>ワークショップ開催費</p>	<p>103,350円</p>		<p>会議費</p>	<p>149,497円</p>
<p>日本側</p>	<p>内容：国内旅費</p>	<p>金額：202,160円</p>								
	<p>ワークショップ開催費</p>	<p>103,350円</p>								
	<p>会議費</p>	<p>149,497円</p>								

整理番号	S-4
セミナー名	(和文) 日本学術振興会研究拠点形成事業 宗教文化遺産としての西行「旅する詩人西行」
	(英文) JSPS Core-to-Core Program “Saigyō : A poet in Journey “
開催期間	平成 29 年 8 月 29 日 (1 日間)
開催地 (国名、都市名、会場名)	(和文) ポルトガル、リスボン、新リスボン大学
	(英文) Poreogal,Risboa,University of New Risboa
日本側開催責任者 氏名・所属・職	(和文) 阿部泰郎、名古屋大学人文学研究科・教授
	(英文) ABE Yasuro, Nagoya University, Graduate School of humanities, Professor
相手国側開催責任者 氏名・所属・職 (※日本以外で開催の場合)	(英文) Alexandra Curvelo da Silva Campos, Associate Professor Departamento de Historia da Arte

参加者数

派遣先 派遣元	セミナー開催国 (ポルトガル)	
	A.	B.
日本 〈人／人日〉	5 / 47	
	11	
アメリカ 〈人／人日〉	0 / 0	
	4	
エストニア 〈人／人日〉	0 / 0	
	6	
合計 〈人／人日〉	5 / 47	
	21	

A. 本事業参加者 (参加研究者リストの研究者等)

B. 一般参加者 (参加研究者リスト以外の研究者等)

※日数は、出張期間 (渡航日、帰国日を含めた期間) としてください。これによりがたい場合は、備考欄を設け、注意書きを付してください。

<p>セミナー開催の目的</p>	<p>日本では歌人・僧侶として広く知られた西行（1118～1190）は、文学史のみならず、民間伝承の世界に根付いて、実際の生涯で諸国を修行した以上に、全国に旅する西行（サイギョウ）の伝説が生きている。こうした西行像を創りあげた文化の運動全体を、ひとつの文化遺産として認識するモデルととらえ、そこに民間信仰を含む宗教が如何に関与するかを探ることは、本課題にとっても重要な挑戦的視点であろう。ヨーロッパ日本学協会（EAJS）は、ヨーロッパ諸国及びアメリカ等の海外日本研究者による総合的な人文学の大規模国際学会である。この EAJS 大会は、当該拠点形成相手国の全てが関与する横断的な学術交流の場として最適な機会であるため、研究成果のより効果的な発信効果と相互連携の強化が期待される。その EAJS 大会プレカンファレンスのフォーラムとして、国際的な比較の視野の許に、西行を「旅する詩人」の典型として、世界の遍歴・巡遊する歌びとの系譜の中に置き、その普遍性と特色を探究する試みを、各国から集う日本研究者に提示する。なお、本フォーラムは大会の単なる分科会以上のステイタスをもつプレカンファレンスとして、学会に相対的に独立した主体的な企画によるものであり、学会と不可分一体な卓越した分科会である。</p>
<p>セミナーの成果</p>	<p>大航海時代に世界へ展開し中世日本と初めて交流の歴史を築いたポルトガルにおいて催された EAJS リスボン大会に、旅する詩人である西行を主題とした国際フォーラムを提供し得た事に、まず意義が認められる。本フォーラムでは、拠点形成参加研究者以外にも多くのゲスト報告者を海外(米国・エストニア等)から招き、西行を世界的な視野から捉え直すことを試みた。この西行をめぐる形成・伝承された文化を絵巻や芸能の各分野から多元的に探る企ては、世界文学との比較という視点からも、イタリアやスペインなど南欧古典文学の詩人たちの生涯と作品、英雄叙事伝承などから多角的に西行を照らし出す試みがなされており、多くの参加者に感銘と刺激を与えた。西行の旅やその行動、更には伝承上の記憶を含めて、日本の文化現象としての西行という視点が、あらたに求められるが、その文化的記憶としてのテキストを含めた、西行という宗教文化遺産の認識が共有されたことが、本フォーラムの最大の成果であろう。全体の概要は 9 月に行われた西行学会(静岡英和学院)でも報告したが、内容については、2018 年 8 月刊行予定の『西行学』第 9 号に掲載する予定であり、更にこの成果を踏まえ、2019 年 8 月のエストニアにおける西行学国際大会につながる事が期待される。</p>

セミナーの運営組織	EAJS リスボン大会事務局(新リスボン大学)による EAJS リスボン大会運営の一環として、会場を提供していただいた。		
開催経費 分担内容 と金額	日本側	内容：外国旅費 大会参加費（学会費） 外国旅費にかかる消費税	金額：2,570,730 円 94,918 円 206,527 円

### 7-3 研究者交流（共同研究、セミナー以外の交流）

共同研究、セミナー以外でどのような交流（日本国内の交流を含む）を行ったか記入してください。

日数	派遣研究者		訪問先・内容			派遣先
	氏名・所属・職名	氏名・所属・職名	氏名・所属・職名	内容	内容	
5 日間	木俣元一	名古屋大学人文学研究科 教授	マルク シェー レ	ストラスブール大学 教授	ハイデルベルク大学 セミナー参加・研究打ち 合わせ	ハイデルベ ルク大学
5 日間	百合草真 理子	名古屋大学人文学研究科 助教	ユ ディッ ト・ア ロカイ	ハイデルベルク大学 教授	ハイデルベルク大学 セミナー参加	ハイデルベ ルク大学
3 日間	阿部泰 郎、近本 謙介、三 好俊徳	名古屋大学人文学研究科 教授、准教授、研究員	J・ N・ロ ベール	コレージュ・ド・フ ランス 教授	研究打ち合わせ	コレー ジュ・ド・ フランス
1 日間	近本謙介	名古屋大学人文学研究科 助教	松尾恒 一	国立歴史民俗博物館 教授	研究打ち合わせ	国立歴史民 俗博物館

### 7-4 中間評価の指摘事項等を踏まえた対応

該当無し

## 8. 平成29年度研究交流実績総人数・人日数

### 8-1 相手国との交流実績

派遣先 派遣元	四半期	日本	アメリカ	フランス	ドイツ	オーストリア (第三国)	ポルトガル (第三国)	合計
		日本	1	( )	3/15 (1/11)	( )	4/16 ( )	( )
2	( )	( )	( )	( )	( )	5/47 ( )	5/47 (0/0)	
3	( )	10/71 ( )	( )	( )	( )	( )	10/71 (0/0)	
4	2/16 ( )	( )	5/36 ( )	( )	( )	( )	7/52 (0/0)	
計	2/16 (0/0)	13/86 (1/11)	5/36 (0/0)	4/16 (0/0)	5/47 (0/0)	29/201 (1/11)		
アメリカ	1	(2/41)	( )	( )	( )	( )	0/0 (2/41)	
2	(1/53)	( )	( )	( )	( )	(1/1)	0/0 (2/54)	
3	( )	( )	( )	( )	( )	( )	0/0 (0/0)	
4	( )	( )	( )	( )	( )	( )	0/0 (0/0)	
計	0/0 (3/94)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (1/1)	0/0 (4/95)	
フランス	1	( )	( )	( )	( )	( )	0/0 (0/0)	
2	(1/1)	( )	( )	( )	( )	( )	0/0 (1/1)	
3	( )	( )	( )	( )	( )	( )	0/0 (0/0)	
4	( )	( )	( )	( )	( )	( )	0/0 (0/0)	
計	0/0 (1/1)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (1/1)	
ドイツ	1	( )	( )	( )	( )	( )	0/0 (0/0)	
2	( )	( )	( )	( )	( )	( )	0/0 (0/0)	
3	(1/2)	( )	( )	( )	( )	( )	0/0 (1/2)	
4	( )	( )	( )	( )	( )	( )	0/0 (0/0)	
計	0/0 (1/2)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (1/2)	
合計	1	0/0 (2/41)	0/0 (0/0)	3/15 (1/11)	0/0 (0/0)	4/16 (0/0)	0/0 (0/0)	7/31 (3/52)
2	0/0 (2/54)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	5/47 (1/1)	5/47 (3/55)
3	0/0 (1/2)	0/0 (0/0)	10/71 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	10/71 (1/2)	
4	0/0 (0/0)	2/16 (0/0)	0/0 (0/0)	5/36 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	7/52 (0/0)	
計	0/0 (5/97)	2/16 (0/0)	13/86 (1/11)	5/36 (0/0)	4/16 (0/0)	5/47 (1/1)	29/201 (7/109)	

※各国別に、研究者交流・共同研究・セミナーにて交流した人数・人日数を記載してください。(なお、記入の仕方の詳細については「記入上の注意」を参考にしてください。)

※相手国側マッチングファンドなど、本事業経費によらない交流についても、カッコ書きで記入してください。

8-2 国内での交流実績

1		2		3		4		合計	
	( 2/3 )	1/1	( 2/3 )		( )	12/49	( )	<b>13/50</b>	( 4/6 )

## 9. 平成29年度経費使用総額

(単位 円)

	経費内訳	金額	備考
研究交流経費	国内旅費	444,770	
	外国旅費	12,005,493	
	謝金	275,260	
	備品・消耗品 購入費	0	
	その他の経費	264,415	
	不課税取引・ 非課税取引に 係る消費税	946,287	
	計	13,936,225	
業務委託手数料		1,393,622	
合 計		15,329,847	

## 10. 平成29年度相手国マッチングファンド使用額

相手国名	平成29年度使用額	
	現地通貨額[現地通貨単位]	日本円換算額
アメリカ	20,000 [ ドル ]	2,144,800 円相当
フランス	15,000 [ ユーロ ]	1,980,300 円相当
ドイツ	3,000 [ ユーロ ]	396,060 円相当

※交流実施期間中に、相手国が本事業のために使用したマッチングファンドの金額について、現地通貨での金額、及び日本円換算額を記入してください。